

印象 13 編-2021 年 12 月の総評に代えて

○林 桂○

* 佳作に選んだ作品の中から、総評を書くにあたり選抜するときには、自ずからその世界観に共振するものになってしまう。どこか孤独な佇まいの作品ばかり選んだようで、そのことを自覚した。また、結果として同一の作者を選ぶことともなった。以前もあったが、さいう、まちりこ氏の作品が多い。殊にさいう氏のオノマトペの見事さを再認識させられた。

●さいう●（愛知県）

ねむれない夜に数える
こひつじが二千を越えて
帰ってもらう

* 三行目の「帰ってもらう」に思わず笑ってしまう。眠るために数えはじめた子羊が二千頭を越えても眠気はやってこない。頭の中はイメージの子羊で一杯になってしまった。数えるのを断念する。それを「帰ってもらう」という面白さ。「ひつじ」でなく、「こひつじ」である可愛らしさも笑いを誘う。

●さいう●（愛知県）

大欠伸するとき胸にある花野

* 秋の季語「花野」をこんなふうを書くのに、初めて出会った。胸の中の花野に生きてるゆえの寛いだ欠伸だろう。

●まちりこ●（埼玉県）

幸せが不足している三面鏡

* 自身の姿を三方向から同時に見る視界に、自身の姿のみならず、思わずも寂しい内面に気づいてしまったのだ。

●松下誠一●（東京都）

気付いたら秋が背後にあるように
さらば、十八歳の蛞蝓

* 「十八歳の蛞蝓」は、自身をとえたものだろう。自身をナメクジと呼ぶその内向の力を、「さらば」の外向の力に変えようとする。

●翠●（東京都）

なまぬるいミルクを
胃袋にためて
タンポポ色の
陽に混ざりたい

* 身体的な心地よさとは何か。その感覚の絶妙な比喩がここにある。

●まちりこ●（埼玉県）

書くことが幸せと思えた頃は
書かない時も幸せだった

* 「書く」という幸せが、世界を支配している生活では、書かない時間もその中にある。しかし、いつからその魔法の世界がなくなってしまったのか。

●さいう●（愛知県）

とうめいな器に
ぞん、と冷麺を盛って

ひとりでいると決めた日

* 「ひとりでいる」を、今日一日のことと捉えるか、今後の生き方の問題として捉えるかで、決める行為の意味も大きく変わる。一日一日の決定の延長が生涯の決定に繋がるのかもしれないが、「ぞん」は決意を持っての行為の表現だろう。涼やかな冷麺のさまは、その決定の涼やかさの表現でもあろう。

●さいう●（愛知県）

あたらしい靴を鳴らして
たんぽぽの道を
ぽぽたんぽぽたんに行く

* 「たんぽぽ」からの「ぽぽたんぽぽたん」のオノマトペに惹きつけられてしまった。言葉の響きへの感性がいいのだろう。すべからく、偉大な詩人が兼ね備えていた資質に通じるものがある。

●さいう●（愛知県）

ラクガキが踊る机を寄せ合って

二十年後のぼくらはなし

* 私のような年齢になると、二十年後を希望の未来として語れる若さの奢りを美しいと思う。使い古された学校の机も、その跳躍台である。

●まちりこ●（埼玉県）

父がくれるものは
いつも
ぴかぴかのネジとか
しわくちゃの千円札でした

* ぴかぴかのネジは新品。あるいはネジに関係する仕事をしていて、成果品から弾かれた物かもしれない。しわくちゃの千円札は、父のポケットでしばらく揉まれたものだろう。それでも父が今も尊敬されているとすれば、高価でなくても子供だましの品ではない父自身の生活の品を差し出してくれていたと感じるからであろう。

●さいう●（愛知県）

いちにちの
ねむりを少しずつほどこき
まぶたを持たぬ金魚とくらす

* 一日の朝の目覚め。少しずつ解かれてゆく眠りに、瞼が開く。瞼をもたない金魚の眠りと目覚めはどのようなものか。身近に暮らしながら、違う眠りと目覚めの世界にいる金魚に気づく。

●まちりこ●（埼玉県）

青空を頬張るように口をあげ
おおあくびする君のとなりで

* 「青空を頬張るよう」な大欠伸。もちろん、君に退屈しているのではなく、心を許してリラックスできているからである。何を、どこに行くでもない。となりにいれば成立する関係の豊かさだろう。

●さいう●（愛知県）

ケトルはしゅんしゅん孤独

* 「しゅんしゅん」は湯の沸くさま。白い湯気を出して沸騰していそう。それゆえ「孤独」への転換が際立つ。何物も近づくことを拒絶するようなさまに、自身の孤独な姿も見えているのだろう。